書き抜き読書ノート 1033	2011 年 7 月 26 日

常盤新平著「時代小説の江戸・東京を歩く」日本経済新聞出版社 2011 年 2 月 21 日刊を読む

時代小説の江戸・東京を歩く

１．私は東京の街をよく散策します。繰り返し読んだ時代小説に登場する名所旧跡、江戸や明治から続いているお店をひとり訪ね歩くのが好きなのです。それが目的で出かけることもありますが、だいたいは仕事やちょっとした用事で外出したついでに足をのばしての散策です。

２．ふだん電車や自動車を利用していると意識しませんが、実際に歩いてみると、東京の街は意外と起伏があることに驚きます。そういえば、千駄ヶ谷、四谷、市谷など、谷のつく地名が多い。目黒の権之助坂や行人坂をはじめ、江戸時代からの坂の名前が今もたくさん残っている。知識としてはわかっていることも、自分の足を使ってたどってみて、改めて気づかされ、実感させられます。

３．池波正太郎がエッセイで紹介する食べ物屋に寄る、休憩がてらふらりと入った喫茶店の、コーヒーの味やご主人の人柄に惹かれて常連となる。私にとって、これも東京歩きの楽しみの一つです。

４．徳川家康による開府以来、江戸東京は日本の中心都市として発展を遂げてきました。維新を迎えてしばらくは江戸の面影を色濃く残していたそうですが、それを劇的に変貌させるきっかけとなったのは、大正 12 年(1923)の関東大震災。さらにその二十年後、今度は太平洋戦争の空襲によって帝都は再び焼け野原となります。

５．地震と戦争という二つの災害からの復興事業によって、昭和通り、靖国通り、外堀通りといった幹線街路が整備され、市中を縦横にめぐっていた堀川が埋め立てられ、往時の景観は大きく様変わりしました。

６．昭和 39 年(1964)の東京オリンピックは、戦後のめざましい復興を世界にアピールする契機となりましたが、大会開催にあたって進められた再開発事業も、首都の変貌に拍車をかけました。

７．それでも、江戸や明治の名残は今日もあちこちに息づいています、幸運にも空襲を免れた街の一角が戦前さながらの風情をかもし出していたり、オフィス街の真ん中に創業何百年という老舗がお店を構えていたり。建物こそ瀟洒なビルに変わったものの、江戸商人に心意気を現代に伝えています。

８．昔はここから東京湾や富士山を望めた、この道路はかつて川だった、などと想像してみることも、散策の妙味を倍増させてくれます。そのとき助けになるのが、数々の時代小説、都内各所にある博物館、資料館などの施設、そして「江戸切絵図」や「江戸名所図会」といった資料です。

９．今年、平成 23 年は、現在の日本橋が架橋されてちょうど 100 年目にあたります。江戸東京歩きを始めるには、よい節目の年といえるかもしれません。本書で取り上げた時代小説はすべて文庫で読めます。お気に入りの一冊をポケットに忍ばせて、散策に出かけてみてはいかがでしょう。

－(はじめに)－

[コメント]

自分の好きな街をこのような形で散歩できたらどんなに楽しいものかと思わせる常盤さんのエッセイ集。

藤沢周平の「海鳴り」や「よろずや平四郎活人剣」、「獄医立花登手控え」、「用心棒日月抄」、「溟い海」、「橋ものがたり」、岡本綺堂の「半七捕物帳」、池波正太郎の「剣客商売」や「鬼平犯科帳」、「仕掛人藤枝梅安」など、読んでみたくなった。

－ 2011 年 7 月 26 日林　明夫記－